

慶応三年十一月の暗殺 —中岡慎太郎・坂本龍馬暗殺の真実—

山口 結子

(吉村 亨ゼミ)

はじめに

坂本龍馬と中岡慎太郎について研究しようと考えたのは、高校1年生の時から高知県立坂本龍馬記念館でカルチャーサポーターというボランティア活動をしていたのが大きなきっかけである。そうした活動を行っていたものの、坂本龍馬に特別な興味があるわけでもなかった。「高知が生んだ偉人」であるという認識はあったし、龍馬に関する、それなりの知識もあったが、どちらかといえば、日本の歴史でも平安時代などの文化史が好きだった。母からの薦めもあり、カルチャーサポーターの最初の1年間は、ほぼ毎週土・日曜日に研修を受けるという日が続いた。龍馬に関して多少の知識はあったつもりだが、まったく知らなかったことが多く、話についていくことに必死になりながらも、それなりに知識を得ることはできたと思う。

龍馬について学んでいくうちに、1つの疑問点が思い浮かんだ。それは、坂本龍馬と中岡慎太郎の暗殺についてである。彼らの暗殺には様々な説があるが、どれも決定的な説ではない。坂本龍馬を学んで6年になる今、私自身の考えの集大成として、龍馬や慎太郎が残した謎を、当時の政治的状况を視野に入れながら様々な資料を読み、彼らがどのような考えをもってどう行動し、それを周辺の人物達がどう受けとめたのかということ、その時代の土佐藩の状態などをふまえながら考察し、「坂本龍馬暗殺」の謎の一端に迫りたい。

第1章 土佐に生まれた二人の志士

1. 坂本龍馬

坂本家は、近江の坂本城から1582(天正10)年に土佐国長岡郡殖田郷才谷村(現在:南国市才谷)という地区に住み農業を始めたとされている。

次第に庄屋のような立場になり、出身地の「才谷」をとって「才谷屋」として商売を始め、これも成功し分家で侍の資格を持つことになった。この分家が郷土坂本家で、龍馬はその3代目であった。郷土は筋目のある旧侍が田地3町歩を開発するという条件で定められた身分制度であったが、次第に財力を持つ庄屋(町人)が武士の株を買って侍になっていた。町人から侍になった者や下級の武士は下士と言われ、上級武士や一部の中級武士のことを上士と呼んでいた。

しかし、侍になってもその位置付けは微妙なものであった。城下に住むことを許されていた上士との扱いの差は、歴然としていた。

坂本龍馬は、1835(天保6)年に郷土坂本八平直足の次男として産まれる。しかし実母・幸は病弱で、龍馬を産んでからもほとんど寝たきりの状態が続き、龍馬が12歳の時に亡くなっている。兄や姉とは歳が離れているが、面倒を一番見てくれたのが有名な乙女という3歳年上の姉であった。14歳になった龍馬は、日根野道場の小栗和兵法を学ぶ。そして19歳の時に江戸に出て剣術修行を行っていた龍馬は、浦賀に4隻の黒船が来航するという出来事が起こり、品川に警備として出ている。この事件がきっかけで、龍馬は日本の将来に大きく関わっていくことになった。龍馬はこのときの出来事を、土佐に帰った際、ジョン万次郎(中浜万次郎)がアメリカから帰って来たときに取り調べを行なった河田小龍という人の元に行き、話しを聞いた上で、日本にも強い船を造らなければと考え、世界を意識するようになる。

その後、龍馬は再び剣術修行に江戸を訪れるが、1862(文久2)年、江戸幕府の海軍担当勝海舟に会いに行き、門下生となった。門下生となるまでの有名な話が、龍馬の江戸での剣術修行先である千葉定吉の息子重太郎と、勝を斬るために勝邸に行った一件で、勝の考えに感銘を受けて門下生と

なつたと言われている。その前年 1861（文久元）年に、龍馬は幕府を倒すために武市瑞山（半平太）が率いる「土佐勤王党」に入っているが、翌年 3 月には脱藩してしまう。龍馬は海軍塾をつくるが、勝が反幕府運動の疑いから失脚してしまい閉鎖される。その後の龍馬は各地を巡り、薩摩藩と長州藩を結ぶ薩長同盟を 1866（慶應 2）年に中岡慎太郎らと共に締結させるが、その翌年に暗殺された。

龍馬は、自分で考えても分からないことを素直に人に聞くことができた人だと言われている。小椋克己氏は、龍馬の人脈の広がりや「ウィルスの」[後註①] だと言っている [後掲の図 1 参照]。坂本龍馬の人懐っこさは、周りが年上ばかりの末っ子で育った環境にも原因があるのではないだろうか。ただ周りから聞いたことのみを鵜呑みにするのではなく、龍馬自身が聞いた考えを理解し、自分のものにすることができた為に、個性豊かな人物が活躍していた幕末でも一目置かれていたのではないかと思う。

龍馬は 33 歳の短い生涯だが、日本全国を休む暇が殆どないくらいに動き回っている。龍馬はそうした行動派であって、落ち着いて考え込むタイプは、次に述べる中岡慎太郎がそうであると思っている人が多い。確かに龍馬は行動力に優れている。しかし、中岡慎太郎もじっとしていたわけではない。彼も脱藩している。幕末の志士達は、みなその有名な一部分が目立ってしまうが、それぞれに知られていない部分をもっているのである。それを見逃さないようにみていくと、様々な真実が見えてくるのではないだろうか。

2. 中岡慎太郎

中岡慎太郎は、1838（天保 9）年に土佐国安芸郡北川村の大庄屋中岡小傳次、はつの長男として生まれる。慎太郎はよく勉学に励む少年で、4 歳から 15 歳の間に様々な塾に通っていた。その中の一つ、田野学館という塾に入門した慎太郎は、自分の人生を変える人物と出会った。それが、土佐勤王党のリーダーとなった武市瑞山（半平太）だった。慎太郎は瑞山の武術と人格を尊敬し、瑞山が高知に帰ると後を追って瑞山の道場に入門してしまう。

慎太郎は、龍馬とは違い、物事を重く受け止め

る生真面目な人間でもあった。だからといって、面白みがない人ではない。慎太郎の写真の中に、歯を出して笑っている写真がある。当時の人は（まして男性が）、人前で歯を出して笑うということが普通ではない時代である。彼は、そうしたユーモアのある一面も持っていたのだが、やはり非常に責任感が強く、真面目であった。それが彼を、討幕派のリーダーとして活躍させることになる。

慎太郎は、自分の思想を『時勢論』にまとめている。もともと同じ土佐勤王党に入っていた慎太郎と龍馬であったが、末期になると考え方は決定的に違うものになっている。その考えとは、「慎太郎のいう「攘夷」とは、国交を開き、富国強兵を実践することで、独立を脅かす外国勢力を排除するためであると述べている。そして長州藩の尊王攘夷運動、アメリカ独立戦争といった民族的独立闘争を挙げている（これらすべての例は全ての『時勢論』で紹介している）」[後註②] とあるように、平和的に話し合っ解決するというよりは、止むを得ない場合は武力による解決もあると考えていた。さらに「今日、助徳川の策は無也、政権を朝廷に返上し、自ら退て道を治め臣子の分を尽くすに在り」[後註③] と大政奉還の必要性も説いているかのようだが、「『富国強兵と云ふものは、戦の一字にあり』と主張する慎太郎にとって大政奉還はあくまで変革のための一手段でしかない」[後註④] と考えられていた。慎太郎の討幕に至るまでの方法は、薩摩や長州がとった方法とほぼ同じといってもいい。脱藩して向かった先が長州藩であり、長州や薩摩の者達と関わりが深かったので、似た考えになるのも不思議ではない。慎太郎は土佐藩の同志に「土佐という狭い場所で活動するのではなく、京や長州に出てきて討幕活動を行なうべきだ」という手紙を送っている。

1861 年には土佐勤王党に加盟するが、1863 年、京都で「八月十八日の政変」が起こり、土佐でも活動の弾圧が行われ、慎太郎は脱藩している。武市瑞山（半平太）はあくまで主に仕えることをよしとし、土佐藩から脱藩し活動をするとはなかった。慎太郎は武市瑞山の考えに賛成し土佐勤王党に入ったわけだが、土佐勤王党の活動で大坂や京都に出向いた際に様々な考えと出会い、日本のために活動をする多くの人々を見て、脱藩を決

めたのである。それから2年後、土佐で土佐勤王党の獄で武市瑞山などに厳しい審理を下したのは、後に建白書を献上することになる後藤象二郎であった。この時の後藤の厳酷さは、周辺からも怖れられた。慎太郎が尊敬していた武市瑞山（半平太）は、この年に切腹した。この時、瑞山以外にも、慎太郎が師と仰ぐ人物やかつての同志達（野根山二十三士）も亡くしている。その同志達を厳しく弾圧したのもまた後藤象二郎であった。

第2章 土佐藩の身分制度

1. 江戸時代の土佐藩

1600（慶長5）年、関ヶ原の戦いで西軍につき敗れた長宗我部氏にかわり、山内一豊が土佐に入国した。山内氏は土佐の国づくりの中で、藩の組織を上士と下士に分けた。上士というのは郭中に住居を構えることができ、身分も高いもので、禄高の高いものから家老・中老・御馬廻・御小姓組・御留守居組があり、江戸時代末期になるにつれ様々な役回りができ複雑になっていった。「下士とは200石までの身分のもので郷士・用人・徒歩・組外・足軽からなり、庄屋や町年寄も準士族としての待遇を受けることができ、勤続年数などにより名字帯刀などが許されることもあった」〔後註⑤〕が、住まいは上士とは完全に区分されていた。現在、龍馬生誕地の碑や後藤象二郎生誕地碑を見ると、その境界線は、さほどかわりがないように見えるが、境は今とは違いきっちり分けられていた。

初めは、筋目のある旧侍が田地3町歩の開墾という条件をもとに、郷士という身分がつくられた。しかし、社会が平和になり落ち着きを取り戻すと、郷士という身分が曖昧になっていった。郷士株ができ裕福な町民や農民が株を買い、郷士という身分を得ることができるようになったのである。「郷士（下士）は制度創始以来、名字帯刀、年頭の藩主拝謁や御のり初参加など、儀式ごとでは取りあつかいに少々の差はあってもお侍とおなじ点がある。差別は、むしろ日常生活に目立った。＜中略＞高知城下郭中において禁じていた郷士以下のかぶり笠禁止を、暑くなる五月から八月にかぎり許した。むろん上士に会えばとらねばならず、深い

笠もだめだったが、それでも以前にくらべれば良くなった。注目しなければならないのはそのこと自体ではなく、このような規定が、しばしば郷士以下農工商三民にいたる人々すべてに共通していることだ。郷士は、それだけ蔑視されていた」〔後註⑥〕という。

このように、いくら下士である郷士の身分を手に入れても、人々には侮られる存在であった。差別はまだまだあり、家老や中老に行き会うとうずくまらなければならないし、服装も、郷士以下は絹類の使用を禁止されていた。羽織の裏に絹を用いるごまかしも禁止されて、郷士と言う呼び名があるだけで、扱いや世間の目は待ではなかった。

郷士ではない町民や農民たちが侮るぐらいであるから、上士にしてみればほとんど存在が無いようなものだったかもしれない。土佐藩はとにかく身分の差をはっきり分けていた。それは身分が上になればなるほど強く残っていた。当然、上士には身分に限らず平等が一番良いと思っていた者もいるかもしれない。

また土佐勤王党に入り活動していたのは、郷士や町人、農民などがほとんどであった。彼らが土佐藩の中で支持されるのは、彼らとは違う考えを持っていた上士たちにとって、屈辱に近いものだったのかもしれない。

2. 後藤象二郎と坂本龍馬・中岡慎太郎

ここでは後藤象二郎について、なぜ彼が土佐勤王党に対して誰の目からも残酷な審理をくだしたのか、坂本龍馬・中岡慎太郎に対してどう考えていたと思われるのかを考えていきたい。

後藤象二郎は、1838（天保9）年に御馬廻後藤助右衛門の長男として土佐の片町（現在：高知市与力町）にうまれる。象二郎はその後、藩の大監察、仕置役に就く。土佐藩の大政奉還建白書を幕府に提出し、明治時代は政府参議になった人物である。

前にも述べたが、象二郎は1865年に土佐勤王党の獄で厳しい審理を下している。象二郎の立場（大監察）上、彼らの罪を軽くできないことは当然であるが、もう一つ、彼にとっては叔父でもあり師でもあった吉田東洋が、土佐勤王党の手で暗殺されたことにもあった。

後藤象二郎の叔父吉田東洋は土佐藩士で、1853年の藩政改革の際に山内容堂（この時期は豊信と名乗っていた）に起用され手腕を発揮したが、一時失脚する。しかし、その間に学識のある中級家臣を自らが教育し、育成することに力を注いでいた。1858年に復歸、自分の育てた人材を用いて、開明的な政策や公武合体路線を推進していった。

東洋の思想や動きは、上級家臣を中心とした保守派にも軽格の多い土佐勤王党にも憎まれる存在であった。特に土佐勤王党の主張を書生論として一蹴した為、勤王党の憎しみは大きなものであった。そして1862年、土佐勤王党の那須信吾・安岡嘉助・大石団蔵によって暗殺された。吉田東洋の知人は「あれは平穩に死ねない」と言っているほど、いつも狙われている状況だったようだ。

東洋を斬ったのが土佐勤王だとみなされてから、後藤の追及は厳しいものとなった。土佐勤王党のリーダー武市瑞山（半平太）の実弟田内衛吉は服毒自殺、島村衛吉は拷問死をしており、後藤の周辺が彼を恐れたのも無理はない。

第2章1でも述べたが、土佐（高知県）人は新しいものが好きであるが、根本的なところでは保守的な考え方が強い。龍馬や慎太郎や瑞山は、侍の中でも下士と呼ばれる低い身分の侍（侍といっても侍の資格を株で買った商人などが多かった）であって、後藤象二郎や吉田東洋ら上士とは、きっちりと身分差が固定化されていたのである。そのため、叔父の吉田東洋が土佐勤王党に暗殺されたことは、上士である後藤象二郎にしてみると侮辱されたような感覚であったであろう。これほど土佐勤王党に対して厳しい対応を取った後藤が、後に容易く龍馬や慎太郎たちを受け入れるだろうか。

吉田東洋を暗殺した内の一人である那須信吾は、坂本龍馬と同じ日根野道場で剣道修業に励み、龍馬が脱藩する際に自分の家に泊め、翌日には脱藩の道の途中まで道案内した仲でもあった。象二郎が龍馬を本気で認めようとする気持ちは無く、「船中八策」を建白書に盛り込み献上したのも、その時はそれが一番自分にとっても土佐藩にとっても良い策であった為に和解をただけのことと言えるのである。龍馬という存在は、象二郎にとっては、それほど恐れ、害がある人物ではなかった。

それでは、中岡慎太郎に対して、後藤象二郎はどう思っていたのだろうか。慎太郎と象二郎が直接会話をしたのかは分からないが、お互いあまり良い感情は持っていなかったはずである。象二郎にすれば、慎太郎は叔父を暗殺した土佐勤王党の一員であり、自分よりも身分が下でありながら薩長同盟などを成功させた存在である。その時期、土佐藩は激しい動きを嫌う傾向にあった。薩摩長州は武力による討幕に進んでいたが、土佐藩はなかなか行動に踏み切ろうとはしなかった。新しい時代に、自分たちの立場が危うくならないようにするためである。それをふまえて考えると、土佐藩・後藤象二郎は、中岡慎太郎の存在こそが邪魔になると考えた可能性は高い。

第3章 暗殺の諸説

1. 様々な説

坂本龍馬・中岡慎太郎を暗殺した者はどこの誰なのか？ これには諸説があり、現在もはっきりとはわかっていない。世間一般に言われる説は「薩摩藩説」・「長州藩説」・「京都見回組説」・「新撰組説」などであるが、どれも確定できる証拠がないために、それぞれの主張に委ねられているのが現状である。

薩摩藩と長州藩のどちらも、坂本龍馬とは深い縁がある藩であるが、戦いをせずに話し合うことで国家形成を計っていた龍馬とは違い、武力で幕府を倒すことを目的としていた。しかし、「龍馬と土佐藩は、薩摩藩の了解を得たうえで大政奉還策を推進し、徳川家と諸藩の連合政権を築こうとしていたのだが、薩摩藩がその裏で武力討幕に動き、『討幕の密勅』までも獲得した」[後註⑦]といわれるように、薩摩藩は討幕に向けて動いていた。これを、話し合いでの解決が重要と考えていた龍馬に知れたら、薩摩の立場がわるくなるので暗殺したというのが「薩摩藩説」・「長州藩説」の大まかな理由である。

しかし、「薩摩藩にとって龍馬個人の殺害は無意味になる」[後註⑧]との考えもできる。なぜなら大政奉還策を進めていたのは龍馬個人ではなく、土佐藩として推進していたのだ。「薩摩藩説」でないならば「長州藩説」という線が浮上するが、

「長州藩の木戸孝允は、坂本龍馬の墓碑銘を書いている」〔後註⑨〕だけに、直接結びつけるのは難しいと考えられる。

次に有名な説が「新撰組説」である。暗殺現場に新撰組隊士のものであるといわれる鞆が残されており、「こなくそ」という方言を喋る者がいて、この方言は伊予国（現在：愛媛県）の方言であるとされたことから、伊予国出身である原田左之助らが暗殺者だと言われていたが、中岡慎太郎・坂本龍馬を暗殺する動機が他の説に比べると薄い。新撰組も幕府（会津藩）に忠誠を誓って動いていたのだから2人を暗殺する動機はあるが、幕府（会津藩）には家柄のある組織である京都見廻組が存在していた。新撰組の働きに信頼が無かったとは言えないが、薩長同盟を締結させ、諸方に顔が知れている中岡慎太郎・坂本龍馬の最重要人物を暗殺させるとしたら、新撰組よりも京都見廻組に指示するのではないだろうか。このように、鞆などの物証も、「こなくそ」という方言を話す者がいたという話も、共に確証はなく、現在では「新撰組説」は有力視されていない。

2. 京都見廻組説

では、誰が坂本龍馬・中岡慎太郎を邪魔だと考えていたのだろうか。そこで次に京都見廻組説が浮上してくる。「龍馬は慶応二年（一八六六）一月の寺田屋遭難事件のさい、伏見奉行所の捕り方を射殺しており、幕府の指名手配犯だった」〔後註⑩〕ので、「龍馬を殺害したのは、その捕縛命令の撤回が徹底される前に行動を起こした、佐々木只三郎の指揮する京都見廻組だった」〔後註⑪〕ということになる。確かに、明治になって、元京都見廻組の今井信郎が殺害を自白している。

箱館戦争終結後、降伏してきた今井信郎が取調べを受けて、近江屋事件について、自分は見張り役であったが自分たちの犯行を認めた。それは『刑部省口書』に書かれている。しかし、「明治三十三年発行の『近畿評論』五月号に、『今井信郎氏実歴談』として『坂本龍馬殺害者』が発表された。《中略》文中で今井は「刑部省口書」にある見張り役を否定し、『坂本龍馬と中岡慎太郎を斬ったのは《中略》実は私です』と認めている」〔後註⑫〕のである。このように供述が違うのは、今

井が旧幕時代の行為は罪に問われないことを知らないで、かつての仲間に罪が及ばないように自分だけが罪を負って事件の幕引きができると考えていたことによると、菊池氏は述べている〔後註⑬〕。

旧幕時代の行為が罪にならないことを知らなかったにせよ、自分だけで罪を負って早くその事件を終らせてしまいたいと思わせたのは何なのか。彼らの影には、守らなければならない誰かの存在があったのだろうか。

石尾芳久氏によれば、「龍馬が暗殺された近江屋に接近（五十メートル）したところに土佐稲荷と俗称された岬神社があり、これは土佐藩邸の一角であるが、土佐稲荷参詣者のために通行を許可していた」という。西尾秋風氏は「幕府役人もてをいれることはできない」大名屋敷の一部に、「一般町民が自由に入出入りできる場所があった、ということは、全く意外なこと」であるとされ、ここに暗殺集団が集結していたと推測されている。この事実は、極めて重要なことを示唆する。「幕府役人もてをいれることはできない」とすれば、暗殺集団（見廻組）の集結をも、土佐稲荷の参詣者として黙認するという土佐藩そのものの立場、少なくとも暗殺を厳戒するという立場をとらなかったことを明示するものがある」との指摘がある〔後註⑭〕。ここで私は、土佐藩がなぜ厳戒体制をとらなかったのかという疑問から、一つの案を考えた。

第4章 土佐藩・後藤象二郎黒幕説

1. なぜ暗殺されたのか

考えたのは、土佐藩・後藤象二郎黒幕説である。いくら坂本龍馬・中岡慎太郎が薩長同盟を成しえた人だとしても、京都見廻組からすれば指名手配犯である。明治の供述で、誰が指揮をとったのか不明であるということも謎である。

そこで、後藤象二郎に注目したい。第2章2でも述べたが、坂本龍馬と後藤象二郎は、本来ならば話をするのではないような関係にあった。だが1867（慶応3）年（この年の11月に暗殺される）1月に長崎で会談を行なっている。だが後藤は、自分の考えをはっきりと龍馬に言わないところがあった。それは後述するように、後藤象二郎

や土佐藩は、龍馬や慎太郎のように積極的に幕府を倒す（討幕に対する龍馬と慎太郎の考えに違いはあった）とは考えていないふしがあった。

龍馬とは政権返上の当日にも手紙が交わされていて、その手紙の内容は、龍馬が後藤に「政権返上を漠然としたものでなく財政権など様々な権利を剥奪するべき」と言い、更に「『江戸の銀座を京師二うつし候事』が肝要である、とある。すなわち幕府の財政権というものの剥奪を考えている（龍馬が考えている）」[後註⑮]のである。この時、龍馬には、薩摩や長州、またはその他の武力によって幕府を倒そうとする者達の動きがみえていたのではないか。だから、幕府には力が無いとするためにも、徳川幕府の権力も財政も返還せねばならないと龍馬は考えていたのではないか。このような考えを持っていたからといって、龍馬がただひたすら徳川家を守ることに力を入れていたのではない。龍馬は徳川幕府と討幕派による国内での争いが隙を生み、そこにつけこまれることによって欧米各国の思い通りになることを恐れたのである。

後藤象二郎が政権返上を終え、下城して龍馬に送った手紙には「『直ちに上院下院を創業することになった』と書かれているが、実際は將軍に謁見した際にもこれからについて述べることなく形だけのぼんやりとしたものであった。後藤が龍馬に託されたようなことを將軍に何もいわなかったことは、『昔夢会筆記』に、慶喜自身の証言がある」[後註⑯]とある。ここですでに、龍馬と後藤の考えや目的に関する大きなズレがみえている。それから龍馬と後藤は手紙などにより意見交換を繰り返していくが、2人の考えの違いが埋まることはなかった。漠然としてしまった大政奉還の建白書提出であるが、そもそも大政奉還に対する土佐藩としての考えも明確なものではない。

山内容堂は公武合体派であった。公武合体派は公議政体論（諸侯会議によって政治を運営しようとする論）を唱えていて、山内容堂の名で提出した建白書では、大政奉還と公議政体論は密接していたものであった。大政奉還をするべきか迷っていた徳川慶喜は、「従来、事後の政治組織がいかにあるべきか迷い、大政返上（大政奉還）に踏み切れなかったとき、公議政体樹立を内容とする大政

返上の建白を聞くに及んで、その懸念が解消し、大政返上に踏み切ったと述べている」[後註⑰]といわれており、徳川慶喜の考えでは、大政奉還された後の諸侯会議で徳川の立場を強くしようと考えたのかもしれない。

2. 龍馬よりも慎太郎

なぜ、土佐藩はこのような道にすすんだのか。山内容堂は「『当家は島津家とはちがって徳川家とは特別な関係があるが、大局からみてその地位にこだわることはできない。』」[後註⑱]という西郷に対する容堂のことは、それは容堂においてすら幕府を見限ったものである」[後註⑲]との指摘もあり、徳川の力が続くことを望んでいたと考えるのにも無理があるように思われる。なぜ土佐藩が政局に登場したのか。「とくに長い間通説化していたのは薩長の討幕挙兵を目前にひかえ、それより幕府を救うため、徳川氏に閏ヶ原以来恩顧を受ける山内氏が、中央政局での自藩の失地回復、薩長二藩への対抗意識を伴って、大政返上の建白を呈出、公議政体の樹立を提案したのがそれである」[後註⑳]とある。

徳川氏に対する恩はあったであろうが、この時期の山内氏の本当の目的は“失地回復”“二藩への対抗”にあったのではないか。新しい時代での自分たちのポジションを確保したかったのではないか。そのためにはまず土佐藩の存在をアピールし、中央にできかけが必要であったはずである。徳川幕府討幕を具体的に進めることが目的ではなかったと考えることもできる。

中岡慎太郎も、土佐藩のはっきりしない対応に苛立っていた。薩摩藩や長州藩と同じように、武力で討幕を進めようとする者達を率いていた中岡慎太郎は、坂本龍馬より土佐藩に疎ましく思われていたのではないだろうか。

たとえ脱藩していると言っても、中岡慎太郎は土佐の人間である。この大事な時期（土佐藩にとってその時大事だったもの“失地回復”“二藩への対抗”）に武力を使って騒ぎを起こされることは、土佐藩・後藤象二郎が最も警戒していたことだと考えられる。警戒度で言えば、龍馬よりも慎太郎の方が警戒されていたはずだ。龍馬は後藤象二郎の煮え切らない態度に歯痒さを感じていたもの

の、だからと言って武力を用いることには反対であった。土佐藩・後藤象二郎からみると無茶な動きはとるはずはなく、土佐藩の害になるようなこともないのである。

龍馬を狙った暗殺ならば、もっと早くに実行できていたはずである。暗殺された日は、近江屋に中岡慎太郎が入ったことを確認してから実行されたかのようなタイミングである。

後藤象二郎は、山内容堂のお気に入りであった。そのために後藤象二郎は、土佐藩にとってより良い方向に時代を動かしていくことを第一に考えて行動していたのである。龍馬と後藤象二郎のように、慎太郎も直接会話が交わされたかは分からない。しかし、中岡は龍馬と違い武力による討幕に向けて同志をつのっていた。元は北川村の大庄屋の息子で、ゆくゆくは父の後を継ぎ地域一帯をまとめていくはずの慎太郎であった。人をまとめる力もっていたのだ。そんな彼が、“武力によって幕府を倒す”と仲間を募れば多くの者は彼の元に集まるだろう。またそのような内容を、暗殺された日、龍馬との密談で話し、武力をよしとしない龍馬に対し、仲間はいるのだということを話していたとされている。

薩長同盟をまとめたのも龍馬ばかりが目立ってしまうが、慎太郎は龍馬に負けないくらいか、それ以上に能力を発揮している。後藤象二郎にすれば、自分よりも身分が下の者だと見ていた中岡慎太郎が、これから先、自分たちと同じ立場にたつのではと考えると、後藤象二郎はいい気持ちはしなかったであろう。私達が考える以上に身分の差というものに厳しい時代であったし、厳しい地域でもあった。

土佐藩、特に後藤象二郎は、自分たちよりも下の身分なのに活躍をし、また過去には、入党していた組織に師でもある叔父が暗殺された。その中の1人である中岡慎太郎が、武力討幕に向けて行動的に活動を進めているとなれば、黙っていらるはずがない。土佐藩が武力討幕に一応消極的だと曖昧ながらも進めてきたアピールは、薩摩や長州の考えである武力討幕が実行に移されては台無しになってしまうのだ。その時点で土佐藩にとって、厄介で危険な人物であったのは坂本龍馬よりも中岡慎太郎だった。

むすびにかえて

坂本龍馬・中岡慎太郎の暗殺については謎が多く、現在でもはっきり断定できる説は無い。様々な証言や資料も残っている。しかし、どれも不確かなものばかりだ。なぜ、こんなにも謎が多いのか。総てが真実とはいかないが、暗殺された者の名前が知られている場合は、大体誰が暗殺したのか、わかっているケースが多いと思われる。

近江屋は京都にある土佐藩邸にも近い場所にあったとされるだけに〔後掲図2参照〕、もっと詳細な記録が残っていてもおかしくないはずなのだ。土佐藩は、2人の暗殺に対しては極めて冷たい対応をとった。2人とも許されているとはいえ、「藩を脱藩した者であるから藩とは関わりがない」〔後註①〕と記されている。ここからでも、土佐藩・後藤象二郎が怪しいと思われる。後年に、もと京都見廻組の今井信郎が暗殺について供述したが、これが誰かをかばう為に、あるいは、かばわなくてはいけないほどの誰かの為に供述も変わっていき、今井信郎だけに罪が着せられたのではないか。今井は誰を守らなくてはいけなかったのか。死んでしまった佐々木の名誉を守るためなのか。更にその背後にいる人物の名誉を守るためなのか。

今となっては当然、真実を知ることはできない。だが、私は土佐藩・後藤象二郎説が他のどの説よりも納得できると思う。もちろんこの仮説も、他説と同じように断定できる資料があるわけではない。だが、その当時、2人の存在が邪魔だったのは誰かということを考えていくと、土佐藩・後藤象二郎に繋がっていく。また、狙われていたのは龍馬ではなく、慎太郎だったと私は考える。なぜ中岡慎太郎が狙われたのか、その理由は、第3章2でも述べたが、土佐藩・後藤象二郎は大政奉還がされた後の新しい時代の地位を確かなものにしておきたかった。その為に、薩摩藩と長州藩と同じように武力による討幕を進めるよりも、大政奉還建白書の提出などから藩の存在をアピールする方法をとった。討幕でもなく、徳川幕府を擁護するでもなかったが、土佐藩・後藤象二郎は矢面に立たされることの無いように、あえて立場を中途半端なものにしつつも、公議政体の樹立を提案し、確実に裏から表舞台へと進んでいた。

その大事な時期に、武力による討幕も厭わない中岡慎太郎に動かされては困るのである。土佐藩・後藤象二郎としては武力による活動をされると、中途半端にとってきた立場が一変して武力による討幕と見られてしまうのである。それでは薩摩藩と長州藩の影に隠れてしまうのだ。いくら脱藩した者だと言っても、土佐に家族もいて、土佐にいる志士は慎太郎を慕う者も多い為に無関係とは言えない。同じ土佐藩出身で陸援隊幹部であった「田中光顕は『坂本先生の名がもっとも広く世につたえられています。しかし、私はその識見において、またその手腕において、中岡先生の方がはるかにまさっていたと思います。維新の原動力が三条・岩倉両卿にあることを見抜き、ふたりの手をにぎらせたのも先生であります。坂本・後藤に先だち、政権を朝廷に返させねばならないと言うたのも、先生であります—』」〔後註①〕と言われるほどの人物が中岡慎太郎であり、彼が武力討幕の仲間を集めることは難しいことではなかった。

では、武力討幕に反対だった龍馬はなぜ殺されなければならなかったのか。中途半端な立場をとっていた時期に影響がなかったとしても、新しい時代が始まれば、中岡慎太郎と坂本龍馬は表舞台で活躍する人物になるであろう。龍馬は政治家にならないと言っていたが盛んに活動しているだろうし、慎太郎は、政治の世界で重要なポストに就き、更に国の為に奔走するであろう。新しい時代の彼等の姿は、容易に想像することができる。しかし、これは土佐藩にとっても、後藤象二郎にとっても気持ちのいいことではなかったはずである。後藤象二郎は、自分達よりも身分が下で、藩主に対する恩も考えずに自由に活動していた慎太郎・龍馬と同等になることは理解できなかったであろう。

後藤は、叔父であり師でもある吉田東洋を、慎太郎と龍馬が属していた土佐勤王党に斬殺されていたが、後に和解している。しかし、簡単に許せるものだろうか。後藤は、土佐勤王党の主要な人物を周囲が恐れるほど厳しく裁いているのだ。私は、後藤は二面性をもったところがあり、その時その時に態度や考えを変えることができたのではないかと考える。特に危険な人物は慎太郎であったが、龍馬も自分達の存在を脅かす存在であり、

ともに暗殺されたのではないだろうか。

中岡慎太郎・坂本龍馬を殺さなければならない理由をもってしたのは、土佐藩・後藤象二郎であると私は考える。

「暗殺を指示したのは土佐藩・後藤象二郎である」と言うには不安があるが、これはあくまで数多くある説の中の一つなのである。坂本龍馬暗殺については謎が多すぎるし、詳しい資料がまったく残っていない。どれが正解かは誰も分からない。だからこそ、様々な意見を出していくことが暗殺の謎を解いていく足がかりになっていくのではないだろうか。

【補説】

武市瑞山(半平太)…1829(文政12)年～1865(慶応元)年長岡郡吹井村

坂本龍馬とは遠縁にあたる。お互いをあだ名で呼び合う仲であった。武市瑞山が結成した土佐勤王党(尊王攘夷)は公武合体派の実力者・吉田東洋を暗殺し、一時期は藩論も尊王に導いたが山内容堂は公武合体の考えがあった為に土佐勤王党を弾圧していった。その弾圧を行ったのが後藤象二郎であった。1863(文久3)年9月に瑞山は捕らえられ切腹となった。

野根山二十三士…1864(元治元)年7月
田野の郷士清岡道之助を首領として安芸群下の尊王攘夷派23人が、藩政の改革と捕らえられた武市瑞山釈放の嘆願書を提出したが、聞き入れられることはなく徒党強訴とみなされ捕らえられることとなった。その場合には手向かいするものがあればその場で殺してもかまわないという方針も出された。その結果、一時は阿波まで逃れたものの蜂須賀氏の兵に捕らえられ送還されてからは訴える場を設けられることなく奈半利川に設置された刑場で処刑された。その罪を吟味せずに即処刑を許した命令書の署名には当然後藤象二郎の名前もあった。

【後註】

- ①小椋克己「特集 手紙にみる龍馬のまなざし」(日本学術振興会 井口記念人間科学振興基金主催『特別講演記録』2003年9月16日 p.10)
- ②豊田満広「時勢論からみた中岡慎太郎」(『靈

- 山歴史館紀要』16 霊山顕彰会霊山歴史館 2003年4月 p.7)
- ③前掲註② p.8
- ④前掲註② p.9
- ⑤土佐史談会編『高知城下読本』高知県教育委員会社会教育課 p.6～8
- ⑥松岡 司「新編 坂本龍馬青春伝—青い航跡—4 郷士の社会的地位」(『歴史読本』45(7・通号722 新人物往来社 2000年4月 p.226～227)
- ⑦菊池 明「キーワードで読む坂本龍馬最新情報」(『歴史読本』49(7・通号776) 新人物往来社 2004年7月 p.178～179)
- ⑧前掲註⑦ p.179
- ⑨石尾芳久「坂本龍馬の死—言論と暴力—」(『関西大学法学論集』36(3～5) 関西大学法学会 1986年12月 p.420)
- ⑩前掲註⑦ p.179
- ⑪前掲註⑦ p.179
- ⑫菊池 明「京都見廻組史録」P.140～142
- ⑬前掲註⑫ p.140～142
- ⑭前掲註⑨ p.417
- ⑮前掲註⑨ p.422
- ⑯前掲註⑨ p.422～423
- ⑰平尾道雄『山内容堂』p.223
- ⑱亀掛川博正「公議政体論と土佐藩の動向 (I)」p.23
- ⑲前掲註⑱ p.23
- ⑳前掲註⑱ p.22
- ㉑前掲註⑨ p.417～418
- ㉒松岡 司『中岡慎太郎—大輪の回天—』(新人物往来社 1999年 p.352)

【参考文献】

- 高知県立坂本龍馬記念館「龍馬 ゆかりの人と土地」
- 土佐史談会・高知市教育委員会(社会教育課)「高知城下町読本」

